

対照表

(1) 社会・環境と健康

法律、行政データなど、大きな変更がみられたものについてまとめました。
お差し替えのうえ、ご利用ください。(2017年3月1日現在)

ページ	該当箇所		旧	新
P.7	1-006	解説	感染症の予防であり、先進国では生活習慣病や環境問題などである。	感染症の予防から非感染性疾患にうつり変わりつつある。
P.11	1-016	解説	根絶宣言	根絶決議
P.21	2-031	解説	遊離残留塩素濃度を0.1mg/L以上に保持するよう義務づけられている。	遊離残留塩素または結合残留塩素の基準が設定されている。
P.21	2-033	解説	水を沈殿し	水を薬品沈殿し
P.27	3-013	解説	肺がんであり、次いで胃がん、肝臓がん、大腸がんの順となっている。(平成24年)。	肺がんである。そのほか近年に多くみられるものとして、減少傾向にある胃がん・肝臓がん、横ばい傾向にある大腸がん、増加傾向にある結腸がん・膵臓がんなどがある。
P.45	4-040	解説	特異度	偽陽性率
P.45	4-043	解説	一方を上げれば一方が下がるといったトレードオフの関係	一方を上げればもう一方も上がる関係
P.50	5-007	問題	脂質異常症(高脂血症)受療率は、40～70歳までの加齢とともに増加する。	脂質異常症(高脂血症)外来受療率は、40～59歳が最も高い。
P.51	5-007	解説	○ 平成24年国民健康・栄養調査では、メタボリックシンドロームが疑われる者の割合は、男女ともに40～70歳までの加齢とともに増加している。	× 平成23、26年患者調査では、脂質異常症の外来受療率は79歳まで加齢とともに増加する。

(1) 社会・環境と健康 対照表

ページ	該当箇所		旧	新
P.50	5-008	問題	40～70歳までの	40歳以降
P.51	5-008	解説	平成24年国民健康・栄養調査では、……男女ともに40～70歳までの加齢とともに増加している。	近年の国民健康・栄養調査では、……男女ともに40歳以降加齢とともに増加している。
P.51	5-010	解説	○ とくに60歳代で高い	× とくに70歳代で高い
P.53	5-018	解説	○ 平成24年国民健康・栄養調査によると、現在習慣的に喫煙している者の割合は、女性では20歳代(12.3%)、30歳代(11.9%)、40歳代(12.7%)が多い。	× 成人女性における現在習慣的に喫煙している者の割合は、近年30歳代～50歳代が最も多く、およそ12%である。
P.52,53	5-022	問題 解説	血中ニコチン濃度	血中コチニン濃度
P.55	5-029 5-030	解説	平成24年国民健康・栄養調査によると、……男性34.0%、女性7.3%となっている。	近年の国民健康・栄養調査によると、……男性35%前後、女性7～8%で、女性は、男性の5分の1程度である。
P.61	5-052	解説	○ 「80歳以上で20歯以上……目標値25%	× 「80歳で20歯以上……目標値20%
P.73	6-025	解説	淋菌感染症	性器ヘルペス感染症
P.73	6-029	解説	H5N1を除く	H5N1とH7N9を除く
P.75	6-036	解説	措置入院では、都道府県知事は、精神障害者であり、入院させなければ自傷他害のおそれがあると認めるときは、精神科または指定病院に入院させることができる。	緊急措置入院では、都道府県知事は、自傷他害のおそれがある精神障害者で急速な入院を要する場合、1名の指定医の診断で72時間に限って入院させることができる。
P.80	TOKU-ICHI ゼミ 31		感染症法の対照となる疾患(平成20年5月施行) 2類感染症中に次を追加 4類感染症中の鳥インフルエンザ(H5N1)を右に変更	感染症法の対照となる疾患(平成28年4月施行) 鳥インフルエンザ(H7N9)、中東呼吸器症候群(MERS) (鳥インフルエンザ(H5N1、H7N9)を除く)
P.82,83	TOKU-ICHI ゼミ 33		定期的予防接種(平成25年5月現在) ※別表①	定期的予防接種(平成28年5月現在)

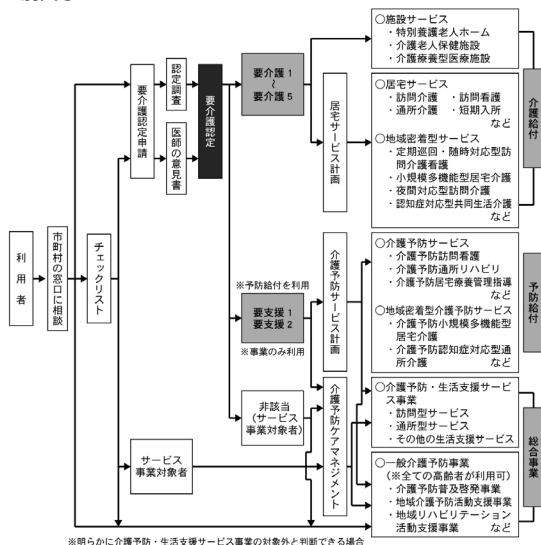
※別表①：太字は変更・追加した箇所です。

	対象疾病 (ワクチン)		接 種				回数
			対象年齢等		標準的な接種年齢等*2		
A 類 疾 病	結核	BCG ワクチン	1歳未満		生後5月から生後8月の間(ただし、地域における結核の発生状況等固有の事情を勘案する必要がある場合は、必ずしもこの通りではない)		1回
	肺炎球菌 (小児)	沈降13価肺炎球菌結合型ワクチン	変更なし				
	水痘	乾燥弱毒生水痘ワクチン	1回目	生後12～36月	1回目は12～15月	2回目は1回目から6～12月経過した時期	2回
			2回目				
	ヒトパピローマウイルス*6	変更なし	変更なし		中1相当	3回	
B 類 疾 病	肺炎球菌 (高齢者)	23価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチン	前年度末に各65歳、70歳、75歳、80歳、85歳、90歳、95歳、100歳の者(平成27年度～30年度までの間)				1回

*6 ヒトパピローマウイルスの予防接種は平成26年6月に、予防接種との因果関係が否定できない持続的な疼痛が、予防接種後に特異的にみられたことから、この副反応の発生頻度等がより明らかになり、国民に適切な情報提供ができるまでの間、定期接種の積極的勧奨が差し控えられている。

ページ	該当箇所	旧	新
P.99	7-057 解説	平成24年の法定特殊健康診断で最も有所見率が高いのは、高気圧(高圧室内業務・潜水業務)(8.1%)である。特定化学物質の有所見率は1.0%で、鉛・石綿に次いで低い。	近年、法定特殊健康診断において最も有所見率が高いのは、東日本大震災後から除染等の業務にかかわる人に多くみられる除染等電離放射線で、9%前後である。特定化学物質は1%程度である。
P.103	7-078 解説	× 学童期の死亡原因で最も多いのは不慮の事故で、次いで自殺、悪性新生物となっている(平成24年)。	○ 学童期で多くみられる死亡原因には、自殺のほか、不慮の事故、悪性新生物がある。
P.105	7-084 解説	非伝染性疾患	非感染性疾患
P.107	7-089 解説	1998年のWHO総会	1988年のWHO総会
P.110	TOKU-ICHI ゼミ39	変更 ※別図②	

※別図②



ページ	該当箇所	旧	新
P.110	TOKU-ICHI ゼミ 41	(平成 24 年 4 月改正)	(平成 28 年 3 月改正)
		〈第一種〉 鳥インフルエンザ (H5N1)	〈第一種〉 中東呼吸器症候群 *2、特定鳥インフルエンザ (H5N1、H7N9)
		〈第二種〉 インフルエンザ *2	〈第二種〉 インフルエンザ *3
		〈脚注〉 * 2 ...鳥インフルエンザ (H5N1) 及び新型インフルエンザを除く。	〈脚注〉 * 2 病原体が MERS コロナウイルスであるものに限る * 3 特定鳥インフルエンザ (H5N1、H7N9) を除く

調査年が多少古いものについては、近年データの傾向に大きな変更がみられない場合、本表に記載はございません。